

2018 年度多摩美術大学校友会奨学金 選考評

織田 美優 美術学部 絵画学科 日本画専攻 4年

動物をテーマに、その野生的な一面と共に一種のファンタジーをも感じさせるイメージですが、実は動物そのものを描いているのではなく、これらを通して空気や光の世界を描いているのだと作者は言います。様々な岩絵の具の顔彩を用いて、繊細で微妙な色調を駆使しながら、卒業制作に最高のパフォーマンスとして挑みたいという公明正大な若々しい意欲を是非応援したいと思いました。

松井 一恵 美術学部 絵画学科 日本画専攻 4年

松井の作品は伝統的な日本画の画題を使って描かれている。しかしその作品が伝統的かと問われると疑問が残る。ゴツゴツとした大木に神性を見だし、それを執拗に描いている画面に、アニメ風の人物を配置しているからだ。しかし技法の矛盾する松井の絵画は、実に日本的だ。そこには繰り返し語られてきた「日本画」の伝統の問題と、今を生きる作者の現代性がそのまま表れている。松井の作品には諸問題を止揚し、現代を生きるリアリティーがある。

吉岡 瞳 美術学部 絵画学科 油画専攻 4年

主体の特性がギリギリ伝わる最大限に簡略化された線、そして実態の持つ印象的な色がコンポジットされ洗練されていくイメージ。これらはあくまでも絵画的であり、まるで詩を読んでいるかのような印象を与え、作者の筆運びの息遣いには心地よさを覚えます。コンセプトは社会とアイデンティティーにまつわる複雑なものですが、作者から抽出されるイメージと表現性からは、今後の様々な可能性が感じられます。

寛 まりな 美術学部 芸術学科 4年

文章には品格があり、論説も明快で内容が論理的に展開されている。縄文の人面把手付土器や人面香炉型土器などの装飾性豊かな土器に関して従来の考古学的な研究を超えて、その芸術性に対する筆者の価値観や芸術観を通しての研究は興味深い。遺産を歴史検証の資料として扱うのではなく、人類が生み出した芸術品として紹介している点も評価できる。岡本や宗の縄文へのアプローチにも注目し研究に厚みを持たせている。ただ、土器発掘へのフィールドワークへのアプローチがなく研究が一面的になっている。

小林 琴美 大学院美術研究科 修士課程 絵画専攻 油画 1年

現代はスピードを求められる時代だ。作品についてもそれが何であるか、どういうコンセプトのもとに作られているかを常に語ることを求められる。小林の作品はそういった風潮に疑問を呈する。作りかけのようなインスタレーションは、それが何であるかという解釈の一手手前で意味を失わせる。いわば自明性を消失させているのだ。それでもなお作品には美？がそこかしこに宿っている。

石田 敦也 大学院美術研究科 修士課程 彫刻専攻 1年

石は、人類の誕生と共に最も古くから関わりのある物質である。今となってはコンクリートにその座を明け渡してはいるが、地球を構成する地殻は全て岩石で出来ている事は、先の震災が何よりも物語る。石田君が石の物質性に惹かれ、交わることで生まれる精神の依代は、現代人が忘れかけていた記憶の情景である。

洞山 舞 大学院美術研究科 修士課程 彫刻専攻 1年

洞山さんは、学部より一貫して鉄による鉄の変容を研究している。文明の近代化を象徴する鉄は、製鉄された工業規格のイメージが強い素材であるが、熱を介する事によって、可塑性のある柔軟で妖艶な側面を持ち合わせている。この様な鉄の持つもう一つの側面を、一度溶解し再び溶接する事により宇宙の記憶を引き出そうとしている。

馬 雪 大学院美術研究科 修士課程 絵画専攻 油画 1年

馬雪さんの作品にはある種のもの哀しさを感じさせられる。1人の孤独な留学生の感覚、現代の日本そして都市の明暗をストレートに描き出している様に思える。もちろん現時点では技術的に稚拙で表現力も褒められたものではないのかもしれないが、作家にとって大切な感性を持っているのではないかと思う。映像作品の中での雑踏と壁が重ねられたシーンは、使い古された表現には違いないが、それが返ってダイレクトな心情を感じさせている。(注・音源はオリジナルで創り出すべき。)

これからの馬雪さんは単にテクノロジーに頼るのではなく、正面から1つずつ描き上げ、その内面表現を努力して引き出す事を心から願っている。

町田 帆実 大学院美術研究科 修士課程 絵画専攻 油画 2年

町田さんの作品写真を見て、まずは楽しさと同時に不思議な感じがしました。研究計画の概要や制作テーマの文章を読んで、それらの感覚が定着したように思いました。本人の「料理は美術に似ていると考える。どんな食材でも美しい画材である。それらに火を通したり・・・様々に変化してゆく。そして最後、皿というキャンバスに、絵を描くように、より美しくより美味しそうに盛りつけるのだ。」という。同時に絵の中の「隙」を大切と捉えながら、それらの思いが素直に大胆に描かれていると思います。今後の活動が楽しみです。

北本 晶子 大学院美術研究科 修士課程 絵画専攻 版画 2年

かつて多摩美の版画には吹田文明、深沢幸雄他世界的な作家が主になって教鞭を執っていた。天才清原啓子も出身である。北本晶子はかつての多摩美を思い起こさせる深く、そして懐かしい感じのする作家だ。マニエル・ノアールで表現されたその世界はご存知長谷川潔、浜口陽三を思い出すと思うが、彼女の作風はまるで60年代の寺山演劇の場面のように、とても丁寧に創られたその「個人劇場」には不思議な動物がいきいきと存在している。

彼女の小さな世界がこれからの版画の世界を大きく変えていくのを願ってやまない。

山之内 葵 大学院美術研究科 修士課程 絵画専攻 版画 2年

山之内の作品のあり方は、日常をいかに見知らぬ状態に置き換えるかという考え方を採っている。使われている材料は、スポンジや既製品の棚、モップの柄などだが、それらが置かれる状態や多少の変形が加えられることによって、見事に不可思議な「もの」へと変容している。なかでも写真に撮ったものの輪廓を切り取り、それを厚みのあるウレタンに貼り付けた作品は、平面とオブジェの垣根を壊し、イメージを往還させていて興味深い。

土田 恭平 美術学部 生産デザイン学科 プロダクトデザイン専攻 4年

音に着目した興味深い研究である。かつては自然界の音や自然の力によって生まれる人工の音など、環境の微妙な音に敏感であった。あたりまえであったことが時代とともに消えてきたこの感覚を再び現代のデザインで提案し、音と生活の関係性を研究するとするもので、これからのデザインに求められる極めて重要なテーマである。並行して進めている Trans-factor もモノ作りの在り方だけでなく、人の生き方まで及ぶ深い考察があり示唆に富んでいる。まだ具体的な姿は見えていないが成果が楽しみな研究である。

武 潔 大学院美術研究科 修士課程 デザイン専攻 グラフィックデザイン 1年

中国の民間芸術「猿回しのアニメーション製作」の計画や過去の様々な表現の作品を見て、武さんの視点の細やかさと優れた表現の可能性を感じました。中でも、フェルトを使った手間のかかるアニメーションや人形アニメーションなどを通じ、忍耐強く表現に取り組む能力を高く評価しています。奨学金を活用してどのような映像を作るのか、今からとても期待をしています。

YANG YAKEN 大学院美術研究科 修士課程 デザイン専攻 プロダクトデザイン 1年

YANG YAKEN さんの『『ココロとからだを癒す』ためのプロダクトの研究』は、丹念なプレゼンテーション資料をまず評価したい。現代社会で求められる「癒し」を目的としたプロダクトデザインがあまり存在していないという問題意識をもち、その研究計画は社会性が高く緻密である。既にアンケート調査等による「癒し」の考察や食文化の分析、五感に着目したコミュニケーションツールの制作等の取組みを進めており、今後の研究成果が期待される。

国 帥 大学院美術研究科 修士課程 デザイン専攻 情報デザイン 1年

3DCG でありながら、アナログ的な温かみを感じる世界観に惹かれました。しかし、それらは緻密に計算されているシステムであることに驚かされます。ロボットの特徴的なデフォルメは、シーン毎の造形ではなく、全てのパーツが矛盾なく、汎用的に利用できるようになっています。これらを公開して、CG スキルのないユーザーにロボット組み立てを楽しんでもらうという取組みは、非常に説得力があり、新たな UX への展開も期待できます。